

「国際規格の FD 戦略」海外派遣研修 報告書

カリフォルニア大学の FD モデルと実施状況の調査

大学院人間文化創成科学研究科（人間科学系）教授 石井クンツ昌子

1. 背景と研修の概要

現在、お茶の水女子大学を含む日本の多くの大学では様々なプログラム・カリキュラム改革が行われている。これらの改革は米国の大学のカリキュラムをモデルにしているものが多い。カリフォルニア大学は研究・教育・運営面で世界的に高い評価を得ている総合大学であり、FD に関して多くのことを学べると考え、この海外派遣に応募した。本研修の主な目的は南カリフォルニアに位置するカリフォルニア大学の4分校を訪問して、FD の取り組みと実施状況を調査することであった。

具体的には以下の日程でカリフォルニア大学の4分校（リバーサイド校・アーバイン校・サンディエゴ校・ロスアンゼルス校）を訪問し、これらの大学の FD 関係の担当者と教職員へのヒアリングを実施して、大学院ゼミと学部科目の授業参観も行った。カリフォルニア大学リバーサイド校は石井が長年教鞭を取っていた大学なので、そのネットワークを活用して、教職員・福利厚生担当の副学長へのヒアリングを実施し、大学院ゼミと学部科目の授業参観を行った。アーバイン校では親交のある歴史学部の教授から授業についてのお話を聞き、この教授から紹介していただいた Academic Personnel の担当教員へヒアリングを行った。サンディエゴ校とロスアンゼルス校では、ファミリー・フレンドリー制度に関する話をお聞きして、Teaching Award に関する情報などを収集した。

日程（平成 22 年）	訪問場所
2 月 10 日	出国
2 月 10 日～13 日	カリフォルニア大学リバーサイド校
2 月 14 日～15 日	カリフォルニア大学アーバイン校
2 月 16 日～17 日	カリフォルニア大学サンディエゴ校
2 月 18 日～19 日	カリフォルニア大学リバーサイド校
2 月 19 日～20 日	カリフォルニア大学ロスアンゼルス校
2 月 21 日→22 日	帰国

カリフォルニア大学は 10 分校を持つマンモス大学である。これらの分校全てを取り仕切るのは全体の学長（President）で統括オフィスはバークレー校にあるが、それぞれのキャンパスには分校学長（Chancellor）がいる。全ての分校は学則や教職員の福利厚生の規則などを共有しているが、それぞれの分校でユニークな規則やプログラムなども有している。

今回のヒアリングでは大学全体と各キャンパスにおけるユニークな取り組みについてのお話を伺うことができた。近年、日本の大学ではFD (Faculty Development) という言葉が一般化してきており、各大学で様々な試みがなされてきている。しかし、このFDという言葉はアメリカの大学では一般的に使用されていない。今回のヒアリングでもFDの意味を問われたことが何度もあった。アメリカのほとんどの大学ではまとまったFDのプログラムは存在せず、むしろ様々な場面でFD (教員へのサポート・研修) に関するプログラムが存在しているということである。よって、以下の報告では、設備、学生指導、授業評価、教職員の研修、大学院生サポート、国際交流、研究助成、ワーク・ライフ・バランスなどの主要項目に分けて、カリフォルニア大学全体の取り組みと訪問した各分校の特殊な取り組みを紹介していく。

2. 学生数・周辺環境・設備

本研修で訪問した各分校の学部生・大学院生数 (2009年秋) と大学が位置する環境は以下の表の通りである。カリフォルニア大学全体の学部生は179,908名、大学院生は33,939名であるから、今回訪問した全分校では全体の約半数の学部生と大学院生が在籍していることになる。また、周辺環境が重要なのは、各分校へ入学する学部生の人種に関わっているからである。カリフォルニア大学ではアジア系アメリカ人の学生が多いが、例えば、リバーサイドはヒスパニック系アメリカ人が多く居住しているために、リバーサイド校のヒスパニック系アメリカ人の学生数は他の分校と比べて多い。また、アーバイン校は白人の学生が比較的多く在籍している大学である。

分校	学部生数	大学院生数	周辺環境
リバーサイド校	15,852	2,132	ヒスパニック系住民の多い中規模都市
アーバイン校	24,215	3,426	白人系住民の多い中規模都市
サンディエゴ校	23,842	3,645	海を見渡す高級住宅街の近く
ロスアンゼルス校	27,196	7,749	都心より少し離れたカレッジタウン

各分校のキャンパスは広大で、図書館、研究室、教室、学生会館、学食 (カフェテリア)、学生寮、保育園、スポーツジム、大学独自の警察署などの施設も大変充実している。リバーサイド校では過去4年間で新築された建物がカフェテリアや学生会館を含めて5つくらいあり、石井が在勤していた当時の面影があまりなくなっているほどである。また、アーバイン校ではキャンパス内に教員専用の居住地区があり、周辺の土地や家賃などが高いために、多くの教員がこの地区で土地は貸借で、建物は個人所有で住んでいる。また、各分校では最低ひとつの保育園を持っており、学生・院生・教員の子どもたち (未就学児) を優先的に入園させている。

各分校に着いてまず目に入るのが、広い駐車場である。カリフォルニアでは公的交通機

関が乏しいために、多くの教員と学生は自家用車で通勤・通学しているので広い駐車場が必要となる。しかし、無料のシャトルバスサービスを提供しているキャンパスもある。例えば、リバーサイド校では学生が多く住む学外のアパートを巡回して大学まで向かうバスが15分おきくらいにあるので、このサービスを使う学生が多い。また、各キャンパスにおいて目につくのは、身体の不自由な学生・教職員への配慮である。法律で身体不自由者に対する「差別」が禁止されているので、キャンパスにある全ての建物は車椅子利用者のアクセスを可能にしなければならない。また、各分校には **Services for Students with Disabilities** という身体不自由者のためのサポートがあり、様々なニーズに応えたサービスを提供している。目の不自由な学生への教科書録音サービスや耳の不自由な学生への手話通訳提供などがそれらの例である。図書館も学生が利用しやすいように運営されていて、通常7:30~23:00まで開館している。しかし、各分校では学問領域別（自然科学系、社会科学系、文系など）の図書館がいくつもあるので（例えばUCLAは20以上の図書館を有している）、開館時間も様々である。また、開館時間外でも図書を返却できるようなボックスがキャンパスの各所に配置されている。夜遅く図書館から駐車場や寮へ歩いて帰る学生のための「エスコート」サービスも無料で利用できる。



車椅子利用者のためのスロープが
大学各所で見られる。(アーバイン校)

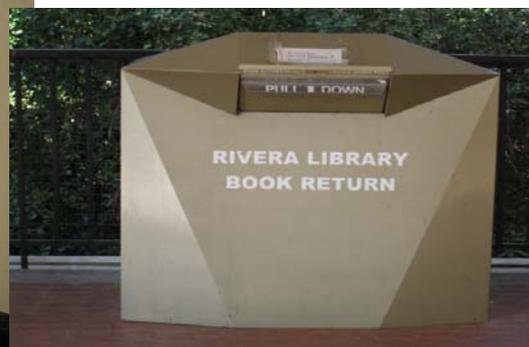


新築のカフェテリア (リバーサイド校)



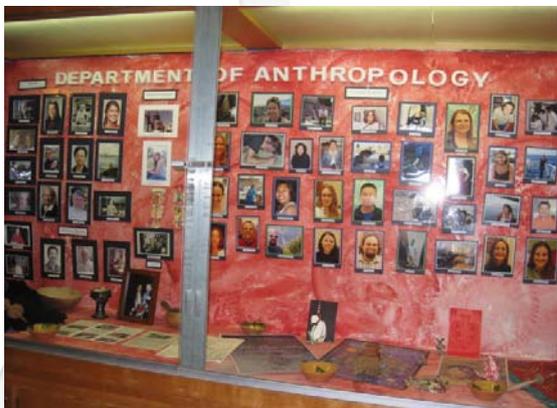
コンピュータが各ブースに配置されている

図書館内部 (サンディエゴ校)



開館時間外の図書返却ボックス (リバーサイド校)

それぞれのキャンパス内で他に目立ったのは各学部の紹介の展示である。これらの展示では各教員の写真と専門領域および出版物などを展示していて、学部の PR に役立っている。また、学部スタッフや大学院生の紹介を行っている展示もあった。



人類学部の展示（リバーサイド校）
大学院生の写真も展示されている。



社会学部の展示（リバーサイド校）下部に
置いてあるのが教員の著書である。

3. 学部生・院生指導（カリキュラム・個人指導・アカデミックアドバイジング）

カリフォルニア大学のバークレー校以外の分校では Quarter 制を取っている。この制度は一年を四つに区切り、新学年の始まる 9 月下旬から冬休み前までを 1 学期目、1 月初旬から 3 月末までを 2 学期目、4 月初旬から 6 月中旬までを 3 学期目、そしてサマースクールを 4 学期目としている。学部によって多少の差はあるが、4 つの分校の教員は通常 1~3 学期を通して、大学院セミナーも含めて 4 科目を担当している。その割り振りには教員の希望が大いに考慮される。例えば、リバーサイド校の Karen Pyke 準教授（社会学部）は昨年度の担当を 1・2 学期各二科目としたので、4 月からの 3 学期目には担当科目はなく、自身の研究に時間を費やしたということだ。また、これらの分校では月・水・金の科目（各 50 分授業）と火・木（各 75 分授業）があり、教員のスケジュールはどちらかに振り当てられるが、多くの場合は隔年交替で担当しているということだ。各分校では遠距離通勤の教員も多いが、これらの教員に対しては可能な限り火・木の授業を担当してもらっている。教員は継続 3 年勤務で一学期分のサバティカルを申請可能であるが、最低 2 学期分のサバティカルを希望している教員が多いので、6 年間継続勤務後にサバティカルを申請する場合はほとんどである。この場合、例えば、2・3 学期目をサバティカルとすれば、夏も含めて、1 月から 10 月までは研究に集中できるということである。

各分校のカリキュラムには多少の違いはあるが、1・2 年次はリベラル・アーツの科目を履修しながら、専攻を決定し、2 年次の最後に進学振り分けがあり、3・4 年次には専攻（Major）の科目を履修する。1・2 年次のクラスサイズは各分校で平均 150~200 名であるが、中には 500 名という入門レベルの科目も存在する。当然、このような場合は複数の TA が割り当てられる。また、アメリカの他大学と同様にカリフォルニア大学では「学部ゼミ

制度」は存在しない。

カリキュラムの特徴としては、通常の科目以外にインターンシップや教員のリサーチアシスタントをする科目も設定されている。学生がインターンシップ先を選択する場合は学内のキャリアセンターにあるインターンシップ雇用リストを活用する。リサーチアシスタントに関しては教員が担当科目でアナウンスすることもあるが、学生の方からアプローチしてくる場合も多いということだ。このように学部生でも教員の研究プロジェクトに参加できる制度が整っている。

教員は一科目につき、週約1時間半のオフィスアワーを設定することになっていて、その時間は研究室外に掲示され、シラバスにも必ずその情報を含めなければならない。また、オフィスアワーに来ることができない学生に関しては、必ずアポを入れてもらい、個人指導をする。

各科目へは必ず詳細なシラバスを配布することが要求される。カリフォルニア大学では、シラバスは教員と学生間の「契約書」であるという考え方が定着しているので、成績の付け方（例えば出欠はカウントするのか）、試験の日程、レポートの書き方などの詳細をシラバスに含めなければならない。このシラバスに含まれない方法で成績を付けた場合は学生から訴えられる可能性もあるので、シラバス内の成績評価方法については教員が特に注意して作成するということだ。

それぞれの分校の学部内には必ず「アカデミックアドバイザー」というプロの職員が存在するが、カリフォルニア大学ではこのアドバイジング制度が徹底しているのが、わが国の大学と相違するところであろう。例えば、リバーサイド校の社会学部では、学部生担当のアカデミックアドバイザーが3名、院生担当のアカデミックアドバイザーが1名いる。これらのアドバイザーは個室のオフィスを持っており、フルタイムでそれぞれの学生へのアカデミックアドバイスをを行っている。学部生へのアドバイジングの内容は必修科目履修、単位数、科目情報などであり、院生へのアドバイジングは主に学位論文に関する規則・規定の周知、フェローシップなどの奨学金、ティーチングアシスタントや求職に関する情報を提供することである。これらのアカデミックアドバイザーの仕事は教員のアドバイジング時間を減らしてくれるので、その分だけ教員は自身の研究や執筆に時間を割くことができるのだ。カリフォルニア大学は研究重視の Tenure 制度を持った大学であるので、教員にとっては研究環境が「プレッシャー・クッカー（圧力鍋）」と考えられているそうだが、このようなプロのアドバイザーの仕事は教員が研究に専念できることに非常に役立っているようである。

他のアドバイジング制度としては各分校に **Reentry Student Program** というのがあり、これは社会人入学した学生のためのサービスである。アカデミックなアドバイスだけではなく、大学への順応の仕方などのワークショップも提供している。カリフォルニア大学では社会人入学者数が非常に多いので、このサービスは多くの学生に活用されている。



リバーサイド校学部アカデミックアドバイザーの方々と



大学院アカデミックアドバイザー

4. 授業参観

リバーサイド校を訪問中に Ellen Reese 社会学部准教授担当の学部科目 (Social Problems) と大学院ゼミ (Gender, Politics and Public Policy) の授業を参観する機会を得た。前者の学部科目の履修者数は 150 名で、TA が 3 名いる。内容は社会問題についてで、授業の構成は講義とフィルム視聴などである。成績は出欠 (10%)、中間試験 (20%)、期末試験 (20%)、リサーチプロジェクト 1 (5%)、プロジェクト 2 (20%)、プロジェクト 3 (25%) に基づいて出され、Grading Scale (成績尺度) も以下のようにシラバス上に明示されている。

100-98: A+	87-89: B+	77-79: C+	67-69: D+	>60: F
93-97: A	83-86: B	73-76: C	63-66: D	
90-92: A-	80-82: B-	70-72: C-	60-62: D-	

また、シラバスの中にある特記事項では以下のような記述があり、障害を持つ学生への配慮が伺え、緊急時の対処方法も明らかになっている。

Students with special needs: If you need accommodations because of a disability, if you have emergency medical information to share with me, or if you need special arrangements in case of the building must be evacuated, please inform me immediately. Please see me privately after class, or at my office. To request academic accommodations (for example, a note taker), students must also register with the campus office for "Services for Students with Disabilities" (125 Castro Hall, 951-827-4538). This office is responsible for reviewing documentation provided by students requesting academic accommodations, and for accommodations planning in cooperation with students and instructors, as needed and consistent with course requirements.

授業参観で気がついたことは、学生からの質問が多いこと、ディスカッションへ積極的

に参加していること、ノートを取っている学生が少ないことなどであった。ノートに関してはこのような大きなクラスでは通常以前に同科目を履修して優秀な成績を修めた学生が大学雇用のアルバイトとしてノートを取り、この講義ノートを大学が安価で販売しているからである。学生の意見やコメントは非常に自由な発想のもとで行われているように感じた。

大学院ゼミは院生数が5名の小規模なゼミであったが、リバーサイド校の他の大学院ゼミと比較するとこの院生数は多いほうであるということだった。学部科目の履修生は非常に多いが、大学院レベルでは少人数教育を徹底して行っているようである。このゼミでは15~20ページのレポートを2本提出すること、必修文献を読むこと、ディスカッションに積極的に参加することなどが課せられている。石井が参観した日には各院生の研究に関する発表と報告がインフォーマルに行われて、それに対するコメントや提案が教員と他の院生から出されていた。各分校の大学院プログラムは原則的には **Terminal Masters** 学位（マスターだけの学位）は存在しないので、院生の全ては博士号取得を目指している。参観した大学院ゼミではインフォーマルながらも大変建設的な意見やコメントが出されていたのが印象的であった。



スクリーンを二つ活用する学部のクラス



インフォーマルな院ゼミのディスカッション

5. 授業評価・Teaching Award・教員研修

学生の授業評価は各分校では講義の最終日に行っている。アンケート用紙は選択式と自由記述の質問を含み、この結果は次学期に教員へ渡される。評点は大学全体と学部全体の平均点とともに渡されるので、各教員は自分の授業評価に対しての全体からみた位置を確認できる。また、自由記述の回答は全てそのまま書き写されたものが教員の手元に届く。

これらの授業評価と学生や他の教員からの情報を元に、各分校内で、毎年、教育的に秀でた教員に **Teaching Award** が授与される。カリフォルニア大学は研究に焦点を置いた大学ではあるが、この教育に関する賞も教員の高い評価につながるということである。

各分校では教員のために授業指導に関する研修や革新的な講義方法への助成などもあり活用されている。サンディゴ校では **Instructional Improvement Program** があり、教員へ

学部科目向上のための助成をしていて、特に刷新的な講義方法を推奨している。ただし、カリフォルニア州は現在経済悪化のために、2010年度はこの助成がカットされるということだ。また、同校では Faculty Mentoring Program があり、新任教員へはメンターが割り振られて、教育および研究へのアドバイスを得ることが可能である。この他には大学院生を対象とした Teaching Workshop などもある。例えば、リバーサイド校では新しい院生 TA は Teaching Assistant Development Program という科目を履修することを義務付けている。

6. 大学院生へのサポート

カリフォルニア大学は世界的に著名な研究に焦点を置いた大学であるので、将来の研究者を育てることは必須である。そのため、大学院生へのサポートは特記事項であると感じた。リバーサイド校の大学院アカデミックアドバイザー（社会学部）の Anna Wire 氏によると、まず入学を許可された院生候補をキャンパスに招待して、見学させる Campus Day というイベントがある。これは優秀な院生をリクルートするための行事であるが、院生志望者へは旅費や宿泊費が支給されて、大学を訪問し、色々な教員と面談する機会が与えられる。このように訪問をしても、優秀な院生候補は他大学院に行く場合もあるので、大学としては院生リクルートのために多額な投資をしているということである。

また、院生は入学時の成績により、様々な奨学金をもらえる機会があり、加えて、各院生には最大2年間のティーチングアシスタントとしてのポジションが与えられる。社会学部を志望する院生に対しては、3つの学内奨学金がある。ひとつは Chancellor's Distinguished Fellowship Award で、入学希望の中で成績が一番優秀な院生に授与される。奨学金額は一年間で約300万である。他には、Graduate Diversity Award と Eugene-Cota Robles Award があり、両方ともマイノリティの大学院入学希望者に授与される一年間で約40万円から350万円までの幅がある奨学金である。また、TAとしての月額給料は35万円程度であるということなので、奨学金プラスTAの仕事で院生は金銭的な心配をせずに生活を送れるのである。これらの大学院生への「手厚い」サポートはカリフォルニア大学全体で行われており、大学の将来の（特に、マイノリティの）研究者を育てる意気込みが感じられた。

7. 国際交流（学生対象の留学プログラム・教員対象のプログラム）

カリフォルニア大学の様々なプログラムの中で特に優れていると考えられるのは学生・院生・教員を対象とした国際交流である。各分校には Education Abroad Program (EAP) があるが、それを統括しているのがサンタバーバラ校にある Universitywide Office of Education Abroad Program (UOEAP) である。UOEAP と各分校の EAP には専任職員が多く配置され、1962年の創立以来60000名以上の学部生・院生に留学の機会を与え、また、スタディセンター所長として550名の教員を世界各国へ配置してきた業績を持つ。現在は

30 カ国以上に位置する 250 のプログラムと協定を維持しており、世界で最も優れた国際交流プログラムを提供している。今回は UOEP を訪問することは出来なかったが、リバーサイド校 EAP の Diane Elton 所長からお話を聞く機会が持てた。Elton 所長によると、最近の傾向として、カリフォルニア大学の学生は短期間の語学に特化したプログラムに参加したい人たちが増えているということであった。これらの短期のプログラムは 3 ヶ月～6 ヶ月のもので、日本へ留学希望の学生にとっても同様であるということだ。

カリフォルニア大学の留学プログラムの良い点は、単位互換が可能であるので、留学しても通常 4 年で卒業可能なこと、留学中も学費はカリフォルニア大学へ納めるので予算が立てやすいことなどが上げられる。また、留学は学部生のみならず、大学院生の学位論文研究のためのデータ収集などにも利用される。教員も各国にあるスタディセンター所長として長期滞在の機会があり、特に、国際比較などの研究を行なっている教員へは研究面で多大な利益があるということだ。このように留学を経験した多くの学生は卒業後に国際舞台で活躍する人たちが多く、留学プログラムの主旨を全うしているようである。

8. 教員への研究助成

各分校では教員への研究助成として毎年 **Intramural Research Fund** という競争的な支援をしている。特に、若手の教員に対しての助成が優遇されていて、**Tenure** を取得するまでの研究サポート体制が出来上がっている。しかし、大学から助成される研究費は一年で平均 15 万円程度なので多額ではない。これは教員に外部の競争的研究助成への応募を促すということ意味合いがあるようだ。

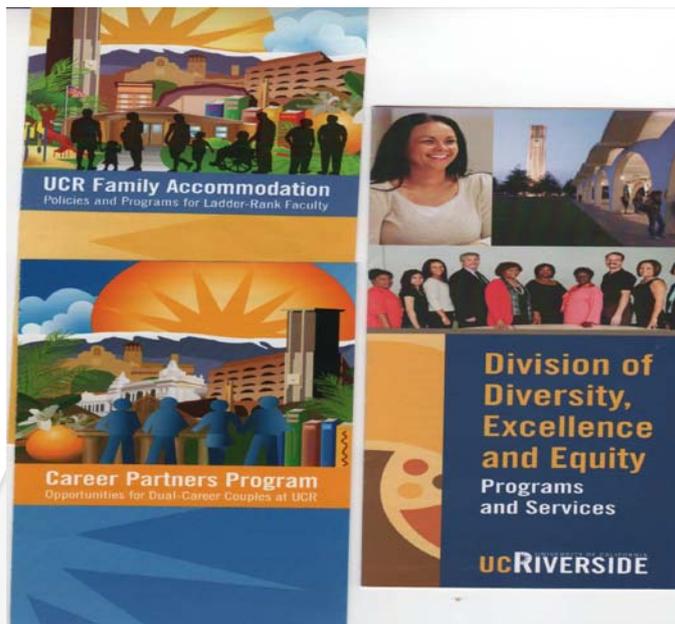
また外部の研究助成金応募のアシストをする **Research Office** が各分校に存在する。これらの **Office** の主な役割は研究助成金の情報を該当する教員へ周知すること、助成金応募書類の書き方のワークショップを開催すること、助成金に関しての政府との交渉、助成金のマネジメントと管理について教員へアドバイスをすることなどである。また、各学部内には教員の助成金応募をアシストするフルタイムの職員が配置されていて、経費の計算や応募書類の確認をしてくれる。

9. 教員の福利厚生（ファミリー・フレンドリー制度など）

今回のヒアリングでは教員の福利厚生について、各分校でこの担当の教員（アーバイン校の Haynes 教授、リバーサイド校の Zuk 教授、ロスアンゼルス校の Becerra 教授、サンディエゴ校の Ferrante 教授）からお話を聞くことができた。これらの担当者が関係するプログラムは主に教職員のワーク・ライフ・バランス、教職員家族へのサポート、共働きパートナーへのアシスタンスを含むファミリー・フレンドリー制度・プログラムの実施および監督、教職員のダイバーシティプログラム、学部長役割についての教育などである。以下ではファミリー・フレンドリー制度・プログラムについてカリフォルニア大学 4 分校の担当者へのヒアリングを通してわかった各分校共通のファミリー・フレンドリー制度の例

を紹介する。

- ① **Tenure Clock Extension** : 諸事情で順調に **Tenure Track** を進むことができない教員に対して最大1年間の延長時間を与える。**Tenure** 制度では通常6年目に **Tenure Review** が行われるが、この延長が認められた場合は7年目に評価が行われることになる。教員が乳幼児や高齢者家族のケアなどで研究に時間を費やせない場合はこのような延長期間を申請するケースが多いとのことだ。
- ② **Modified Duties** : 減給なしで、教員の委員会や担当科目を減らして研究に専念してもらおう。この制度は主に新任教員や若手教員が利用しているケースが多い。
- ③ **Leave in excess of the Family and Medical Leave Act (FMLA)** : **FMLA** は政府が規定する最大12週間取得可能な個人あるいは家族の病時介護有給休暇であるが、規定以上の日数が必要な場合はこの休暇を更に延長することができる。この延長が有給か無給かは各分校の学部長が決定する。
- ④ **Paid Dependent Care Leave** : 産前産後、育児のために取得可能な有給休暇であるが、養子・養女、両親、配偶者およびパートナー（事実婚あるいは同性愛者の場合）のケアが必要な場合も同様に取得できる。
- ⑤ **Phased Retirement** : 退職・退官をゆっくりしたペースで行なう制度である。つまり、完全に退職・退官する前の2～3年間は担当科目数を減らしたり、委員会担当数を減らしたりしながらスローなペースで退職・退官に辿りつくということだ。これは退職者のみだけではなく、その家族へも退職へのアジャストする期間を与えることができる制度である。
- ⑥ **Family Medical Leave Act (1993)** : 乳幼児や新しく養子養女にした子どものケア、家族の介護、自身の病気などの際に職位に影響せず取得できる無給の休暇。
- ⑦ **Reduced Appointments** : 一時期、家族のケアや子どもと関わる時間を長くするために、フルタイムからパートタイムに勤務時間を減らす制度。
- ⑧ **Employment Assistance for Spouses/Partners** : 配偶者およびパートナーの職探しへのサポートである。大学教員は配偶者やパートナーも大学に勤めているケースが多いので、これらの人たちへの職の斡旋を行っている。例えば、リバーサイド校では **Career Partners Program (CPP)** というサポートがあり、新任教員の配偶者も大学教員の場合などは、積極的にその配偶者の学問領域の学部長と交渉して、教員職を作ってもらおうなどしているそうだ。このように、配偶者やパートナーの職を保障することで、より優れた教員をリクルートできるということである。



様々なファミリー・フレンドリー制度のパンフレット。新任教職員のオリエンテーションなどで配布される（リバーサイド校）。

10. 職員の研修について

リバーサイド校を訪問した際に **Management Officer** という学部事務長にお会いする機会を持ち、職員の事情や研修についてのお話を伺った。**Cathy Carlson** 氏は7人の部下を率いる社会学部の事務長である。彼女は旅行会社勤務を経て、大学の事務職に就いた。しかし、平凡な事務職では満足できずにいたところ、学内のマネージメントリーダーシップ研修のを知り、それに参加した。この研修を通じて職員管理について学び、現在の職を得たということだ。このように、カリフォルニア大学では職員研修の機会も多く、モチベーションが高い職員は研修に参加することにより、上位の職に就くことが可能である。

11. まとめ

今回のFD研修ではカリフォルニア大学の4分校（リバーサイド校、アーバイン校、サンディエゴ校、ロスアンゼルス校）における様々な取り組みについてヒアリングや授業参観を通して学ぶことができた。それぞれの分校では教育環境や設備が整っているだけでなく、学生や大学院生へのアカデミックアドバイジングが提供されていること、学部生・大学院生・教員の国際交流が非常に活発に行われていること、ファミリー・フレンドリーなプログラムが豊富にありかつ有効に利用されていること、教職員を対象とした研修プログラムが多くあることなど、大学として理想的な体制が確立していることがよく理解できた。このような素晴らしい制度をそのまま日本の大学に適用することは難しいかもしれないが、今回の研修を通して学んだことを今後の大学教育やFDプログラムに役立てていきたいと思う。